文学部と私

言語学

大学では経済学を専攻した。就職先の企業では上司も同僚も殆ど全員が理学部か工学部の出身だった。前任校では音楽学部に所属していた。こんな私に文学部の広報ができるのか。はなはだ心もとない。文学部は ○○ 文学といった専攻を幾つも抱えるが、私は詩がわからず劇も観なければ小説も読まない。

これではこの文章は「文学部は門外漢でして …」で終わってしまう。このような私の窮状を見越したものか、この文章の執筆要項は「教員」本人も主題として許容している。私自身について書けばいい。それならできそうである。

しかし、である。主題は「私」。これはこれで難しい気もする。なにしろ本誌は文学部の出版物である。私についてなにか書いた途端に「四つ前の文を書いたお前と今のお前の同一性をどう担保するつもりだ」「君と読者との間に生活様式の一致がないので書いても伝わりません」などのお叱りが哲学方面から飛んできても不思議ではない。筆を執ることすら憚られる。

「執筆はパス」という選択肢は無い模様だ。もはや私の記憶（ただし「執筆時の私」版）に拠って私の経歴を記す（ただし伝達可能性は期待しない）よりほかに仕様がない。この決意が結実したものが冒頭の段落における経歴の記述である。

悲壮な決意の産物であるこの文章だが、あらためて見てみるに、あまり広報文らしくない気もする。またこのような広報文執筆の要請があったらと気が気でない。再度の要請があった場合に備えて文学部に詳しくなっておくことを誓いつつ擱筆したい。

井土愼二　准教授

インスタ映えグルメ考

メディア文化社会論

「絵に描いた餅」といえば、実物ではなく何の役にも立たないという意味だ。餅を絵で表現したところで、所詮は食べられない。口に入れられない食べ物なんて価値はないというのが常識的な考えだ。しかしこれとは逆の現象が起きている。旅行番組にはご当地グルメがほぼ必ず登場する。そしてあなたも、ファミレスなどでスマホを取り出し、飲み物や料理の写真を撮り、SNS* にアップしたことはないだろうか。手をつけると形が崩れるので、いい一枚が撮れるまでは空腹はおあずけ …。「映える」食事やデザートを求めて店に並ぶ人々もいるという。

これらの例では、餅を「絵に描くこと」が「食べること」に負けずとも劣らない価値を帯びている。「絵に描いた餅」の故事成語がおそらく想定していなかった意味づけが、現代社会の全ての人とはいわないまでも、多くの人々に共有されていることが推測できる。

1960 年代半ば、メディア学者のマーシャル・マクルーハンは “The medium is the message.” （メディアはメッセージである）と述べた。新聞やテレビは情報伝達のなかだち (medium) となり、その複数形のメディア (media) として総称される。携帯電話やウェブサイトもメディアの一形態だ。ここでメディアそれ自体がメッセージであるというときには、情報内容ではなく、人の生活や価値観を変容させる力に着目している。高性能カメラ付きの携帯電話と画像を容易に送信できる SNS は、写真を日常的に撮影し共有することを可能にした。どんなに美味しく撮れてもそれでお腹が膨れたりはしないけれど、メディアは「食べる」と「描く」の距離感を変えた。

長山智香子　准教授

＊ SNS とはソーシャル・ネットワーキング・サービス（Social Networking Service）の略称。フェイスブック、インスタグラム、ツイッター、ラインなどを指す。

メニューの写真を見比べて選んだ、色とりどりのフルーツが乗せられたパンケーキ。

五月病を中国古典で解決してみる

中国哲学

新年度が始まって早ひと月、ゴールデンウイークも明け、いわゆる「五月病」を患っている方も多いのではないでしょうか。また、「だらけている自分を変えたい」とお思いの方もいらっしゃると思います。そんな方々には是非、身を置く環境を変えてみる事をお勧めしたいと思います。

中国古典には、こんな話があります。「中国の南には、甘くて美味しい実をつける橘（タチバナ）があるが、この橘の実を北に持って行って植えると、酸っぱくて食べられない枳（カラタチ）になってしまう。葉の茂り具合はよく似ているのに、実の味は全くの別物。これはどうしてか。それは南北の環境の違いによって実の性質が変わるからである」と。そして、これは人間も同じだと言うのです。中国春秋時代の斉の名宰相、晏嬰（あんえい）の言葉です（出典：『晏子春秋』内篇雑下）。

実際には、橘と枳とは全くの別種なのですが、むかしの人は同種と捉え、環境によって果実が甘くも酸っぱくもなると考えたようです。そして、同じく人間も環境によって変わると考えました。この話は「南橘北枳（なんきつほくき）」という故事成語にもなっています。要するに、「人は環境次第で良くも悪くもなる」という事です。

もし、皆さんが「上手くいかない」と感じているのなら、それは環境が悪いのかもしれません。実が甘くなるように環境を整えて、実が酸っぱくなる環境とはおさらばしましょう。あの晏嬰も言っているのですから。

ちなみに、これは余談ですが、私の住んでいるアパートの庭には、枳の木が鬱蒼と生い茂っています。

荒川兼汰　博士前期課程 2 年

『晏子春秋』（名古屋大学文学部 中文研究室所蔵）

月刊
名大文学部
第 133 号
隔月刊行

編集発行：
名古屋大学文学部広報体制委員会
koho@hum.nagoya-u.ac.jp
寄稿者の所属と学年は寄稿時点のものです。
2023 年 5 月 10 日発行